区分	番号	器名	備考	群	王	王（2）	王（3）
	66	無其殷	征南夷		厲王		
	67	友殷					
	68	尹姞齊鼎	文様・字体				
	69	公姞齊鼎	文様・字体				
穆王	70	長甶盉	穆王（生称）、井白	㉖	穆王		
	71	遹殷	穆王（生称）		穆王	穆王	
	72	刺鼎	昭王（祀の対象）		穆王	穆王	
共王	73	趞曹鼎一	井伯 王在周般宮	㉖	共王	共王	共王
	74	利鼎	井伯、利 王客于般宮	㉖㉘	共王	共王	
	75	師虎殷	井伯、内史呉	㉖㉗	共王	孝王	共王
	76	豆閉殷	井伯	㉖	共王	孝王	
	77	師毛父殷	井伯	㉖	共王	孝王	
	78	師奎父鼎	司馬井伯	㉖	共王	孝王	
	79	走殷	司馬井伯	㉖	共王	孝王	
	80	趞曹鼎二	恭王（生称） 王在周新宮	㉚	共王	共王	共王
	81	作冊呉方彝蓋	作冊呉	㉗	共王	夷王	幽王
	82	師遽方彝	利、師遽	㉘㉙	懿王	恭王	共王

表2、群別番号表

①2 7 11 19 20 明保・明公 ②3 4 5 伐商 ③3 6 周公 ④4↓43 康侯 ⑤5 15 19 矢令 ⑥5 6 7 8 9 10 11 12 伐東夷東或 ⑦8 16 17 18 58 白懋父 ⑧9 12 30 趞 ⑨10 45 濂公 ⑩11 13↓48 魯侯 ⑪13 14 15 伐楚 ⑫15 31 37 王姜 ⑬15 16 九月在炎 ⑭5 15 19↓49 丁公・父丁・祖丁 ⑮16 25 26 29 召・畢公↓26 27 28 楠伯・楠中 ⑯20 21 𦎫于成周 ⑰22 23 37 46? 49↓50 大保・召公奭 ⑱22 24↓52 匽・匽侯 ⑲30 31 王在庠 ⑳32 37 𦎫于宗周↓33 𦎫于成周 ㉑35 36 在新邑 ㉒52 53 53 召伯父辛 ㉓41 56 57 65 栄 ㉔58 補=1 中 ㉕補=1 60 61 伐南夷 ㉖70 73 74 75 76 77 78 79 井伯 ㉗75 81 呉 ㉘74 82 利 ㉙82 83 補2 師遽 ㉚80 83 85 周新宮 ㉛87 88 89 90 免 ㉜87 89 91 井叔 ㉝87 92 周師 ㉞93 94 95 司馬㸚 ㉟93 96 師晨 ㊱95 97 98 史兇

二　印文陶の問題

林　巳奈夫

尹煥章「関於東南地区幾何印紋陶時代的初歩探測」（考古学報、一九五八、一、七五―八五頁）に最近の研究段階における中国学者の印文陶の問題に関する考えがのべられている。これを紹介し、多少補足する形で印文陶の研究状況の紹介としたい。紙面の都合で、長江、銭塘江流域に地域を限り、福建、広東の方面は別の機会にゆ

	83	師遽𣪘蓋	師遽、王在周、客新宮	㉙㉚	懿王	恭王	共王
	84	鄭牧馬受𣪘蓋（補2）盠彝	師遽	㉙	懿王		
	85	師湯父鼎	王在周新宮	㉚		恭王	
懿王	86	匡卣	懿王（生称）		懿王	懿王	
懿・孝	87	免𣪘	井叔、周師	㉛㉜㉝	懿王	夷王	
	88	免簠	司奠	㉛	懿王	夷王	
	89	免尊	井叔 王在奠	㉛㉜	懿王	夷王	
	90	免盤		㉛	懿王	夷王	
	91	趩觶	咸井叔（奠井叔）	㉜	孝王	夷王	共王
	92	守宮盤	周師	㉝	懿王	厲王	
	93	師晨鼎	司馬共 王在周師彔宮	㉞㉟	厲王	厲王	厲王
	94	師俞𣪘	〃	㉞	厲王	厲王	厲王
	95	諫𣪘	司馬共内史先 王在周師彔宮	㉞㊱	厲王	厲王	夷王
	96	大師虘豆	師晨	㉟			夷王
	97	揚𣪘	内史史先	㊱	厲王	厲王	
	98	蔡𣪘	史先	㊱	夷王		

ずる。

一　分　布

尹煥章（80）〔以下（　）内の数字は末尾参考文献の番号を指す〕によると、印文陶は一九一四―五年広東南海県南越文王冢で初めて発見されたというが、その墓のことを記した蔡守「広東古代木刻文字録存」（攷古学雑誌、創刊号、一九三二、五五―六三頁）には陶器とあるだけで印文陶については記録がない。一九三五年以後常州奄城、金山衛、杭州古蕩（老和山）などいくつかの印文陶遺蹟が衛聚賢ら呉越史地研究会のメンバーによつて発見され、これが呉越の文化に属するものであると考えられ、にわかに人に知られるようになつた（1―7）。解放後発見された遺蹟の数はおびただしく、その華中における分布は大凡次のごとくであることがわかつてきた。

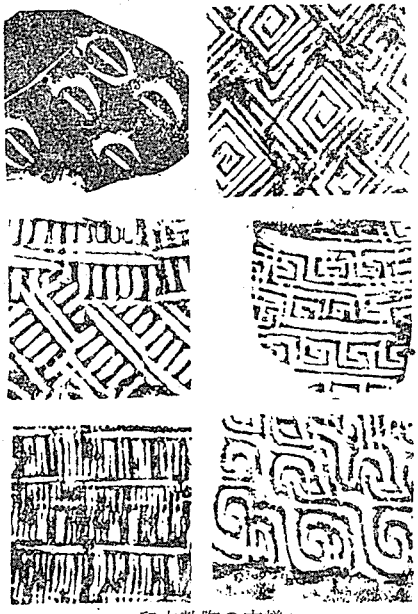
安徽省長江の北では肥東龍城、大城頭、大陳墩、長江の南では当塗天子墳、績溪胡家村(55)、安慶棋盤山(50)、その附近(62)。江蘇省では長江沿いに南京城内の陰陽営(79)、城外の鎖金村(58)、安懐村(76)、その他(21、67)、燕子磯誠実村、江北の団山、楊州鳳凰河(51、64)、丹徒の大港等(25、29、44、50、72、75)、計五七ヶ所。秦淮河沿いに湖熟を中心として老鼠墩など(9)四〇ヶ所。太湖沿岸に宜興高塍、無錫錫山(35)、仙蠡墩(15)、その他(73、83)、呉県越城(5)、金鶏墩(43)、唯亭、その他(61、73)。呉江同里(27)その他(23、28)計三〇ヶ所。江蘇省西南部では溧陽社渚附近供庙等三ヶ所(39)。そのほか社渚(80)、無錫漳山(42)、その他(35、37、73、85)には印文硬陶を出す墓がある。ほかにも(11、12、26、68、74)いく

つかの遺蹟が報ぜられている。浙江省では呉興錢山漾(41)、杭州老和山(1、7、22)、餘杭兆于里、石瀬鎮(22)、その他餘姚茅湖、その他(65)、嘉興雙橋(22、31、32)、その他(84)、武康紅家嶺(22)、温州羅浮山(49)、その他(13)、蕭山臨浦、その他(30、71)、紹興漓渚(33、46、55、67)、寧波(37)、上虞。ほかにも(18、22、47、66)いくつの遺蹟が報告されている。江西省は清江樟樹鎮を中心に三十余ケ所の遺蹟が発見されている(8、20、24、34、60)。湖南省では長沙(54、59)、平江翁江(81)、湖北省では圻春易家山(45)、その他(46)、黄坡楊家湾(82)、京山屈家嶺、司馬河その他(16、17)、漢口戴家山(40)などに分布する。この文化の内容、性質、起源、年代などについて考察するため、次に具体的な資料を記す。

二　台形遺址文化と印文陶

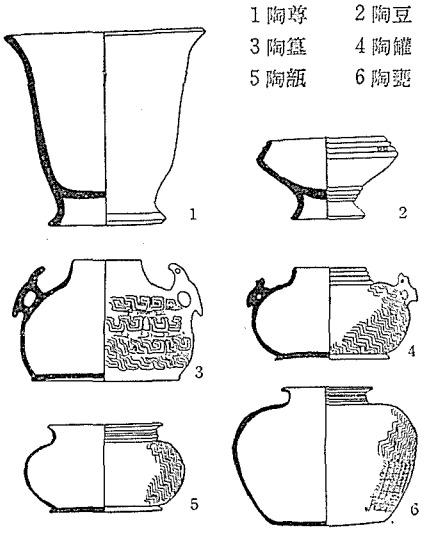
安徽省北部の瓦埠湖、姜家湖、城西湖周辺、南京附近秦淮河沿岸、浙江省の太湖周辺などに円ないし楕円形の丘の上に立地した一種の文化がある。農業、家畜飼養と共に狩猟、漁撈も盛に行つている中原地域の龍山・仰韶系の文化である(14、六八頁以下・77参照)。瓦埠湖周辺の遺蹟には印文陶はないが、その他の遺蹟ではこれが出土する。印文陶には灰色ないし赤色の土器質の焼きの軟陶と、陶質の硬陶がある。若干の発掘例によつて、下層は印文軟陶を伴い、上層に向つて硬陶が増加することが知られる。例をあげると、

(1)　**丹徒大港葛村瓣竈墩**(75)、擾乱された表土を除き、遺物をあまり含まない五花雑土を中間に挾んで上下両層に分けられる。両層とも夾砂紅陶を主とし、印文軟陶を含むことは共通だが、扁足式の三足器、黒皮陶は下層のみにあり、陶質の印文硬陶は上層のみから出る。印文軟陶には罐、鬶、尊、罍があり、印文には青銅彝器のものに似た雷文、編織文がある。硬陶には薄く釉をかけたものもあり、大甕、罐、甑、尊、皿など無錫漳山の春秋戦国墓から出るのと同様な器形があり、雷文、回文、編織文を印する。



印文軟陶の文様

(2)　**南京太平門外鎮金村**(58)、擾乱された層に印文硬陶、六朝の遺物があるほか、純一な文化層が認められる。焼土面、竈跡があり、住居址である。泥質の赤、灰色の印文軟陶と共に黒陶、泥質、砂質の紅、灰陶の罐、盆、碗、豆、盤、鼎、鬲、甑が出土し、石斧、有孔石斧、石鑿、石鏃、石矛、石刀、石鎌、骨角器などがあり、未擾乱の文化層の基底部から殷のものに相近い青銅製の鏃、刀子、釣針、



江蘇無錫錫山公園出土印文陶

スラッグが出ている。印文硬陶、印文軟陶およびそれに伴う土器など、瓻雹墩と全く同じだという。印文軟陶を伴う遺蹟の標準とすることができる。

南京城内の北陰陽営にも同様な遺物を出す文化層がある(79)。すなわち江蘇北部の青蓮岡のものと相似た彩陶を伴う墓地層の上に印文軟陶、青銅鏃を出す同様な文化層があり、ここでは少量の印文硬陶を伴出している。

同様な印文軟陶を伴う文化、および印文硬陶との層位関係は南京安懐村(76)、湖熟附近(9)、揚州附近鳳凰河(64)、南京中央門外小市(67)、無錫仙蠡墩(15)、錫山公園(35)、呉興錢山漾(41)、江西清江営盤里(60)などにも知られる。

三、春秋戦国時代の墓と幾何印文硬陶

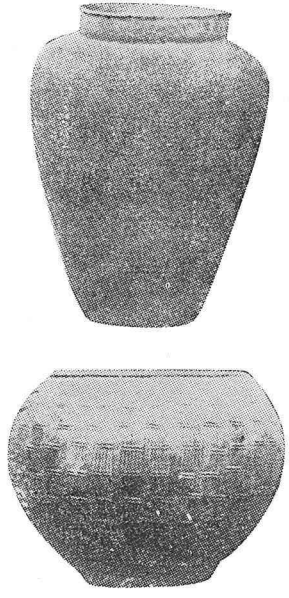
台形遺址の上層には普遍的に印文硬陶があることは前に記したごとくである。江蘇、浙江各地ではそれ以外の多数の遺蹟からも発見されている。溧陽社渚附近の丘陵上に遺蹟が多いが、その中に印文硬陶を伴う墓が新石器時代の文化層に掘りこんで作られている例がある。中に璣に獣頭をつけた春秋戦国の作風の七首、銅剣、戦国時代の鏡などを伴うものがある(80)。印文硬陶は雷文、編織文などを印した甑、罐、尊などである。同様な印文硬陶は蘇州の木瀆五峰山(28)、無錫の嶂山、栄巷、藝圃、墻門鎮(42、73)からも出土し、無錫では茶色の釉を薄くかけた豆を伴う。この釉豆は技法、器形上丹徒煙墩山の青銅器(19、36)に伴った釉豆と近く、これらの墓の時代がそう降らないことが知られる。

現在華中の春秋戦国墓では紹興漓渚附近の戦国墓(47、57)、揚州鳳凰河遺蹟の戦国墓(64)、江蘇省四一四工地の戦国墓(37)、長沙沙湖A・M三六号戦国墓(59)などから印文硬陶が出ており、これは台形遺址上層のものと同様の土器である。印文硬陶が春秋戦国時代のものであり、広く一般に日常使われていたことがわかる。

四、漢代の墓、窰址と幾何印文硬陶

漢時代の墓では典型的な漢時代の遺物に伴つて印文硬陶が出る。すなわち浙江省の紹興漓渚(55)、寧波祖関山(38)、江蘇省の無錫、蘇州、溧陽、湖南省長沙(54)などがあり、紹興漓渚の漢中頃から後漢末頃とされる第二類の墓から出る印文硬陶の焼きは、戦国末から

前漢時代の第一類の墓から出るものより火度が低く、煉瓦色を呈している。



紹興漓渚漢墓出土印文陶

窰址は浙江省蕭山県進化区に三ヵ所発見され(71)、米字文、方格文などの幾何学文を印した硬陶が大量に堆積している。表面に青黄色の釉を薄くかけ、戦国のものより硬度が高い。これは青磁ということができ、硬陶から青磁に発展する中間の一段階の標本と言いうる。

五、印文陶と関係のある文化の性格と年代

印文軟陶を伴う台形遺址文化の人々は湖、河に近い丘の上に住み、住居は竪穴で、その内側は焼いて焼土面とするものもある。農業、漁猟を行い、紡錘車で糸を紡いで衣服を造り、有孔石斧、有肩鏃、有段錛、石刀、石鎌、石矛、石鏃など主として石製の利器を用い、土器は紅砂陶を主とし、印紋陶も若干作っている。この文化は地方色を十分もっているが、中原地域の青銅器文化の影響も受けている。南京鎖金村の擾乱されない層では、殷、周初の様式をもった青銅製の刀子、鏃がこの文化の遺物に伴出し、溧陽社渚のこの文化からは胡の長い青銅戈を模した石戈(77図版二、9)が出ている。印文軟陶の器形には青銅器の𣪘、尊、罍をまねたものがあり、雷文も銅器をまねたものである。丹徒大港煙墩山の墓から西周の康王時代の銘をもつた𣪘と一所に出た銅鬲(36、図版7)は丹徒葛村(75、図版二、10)、南京鎖金村(58、図版五、4)、揚州附近鳳凰河遺蹟(64、図版七、2)などの陶鬲と全く同じ形である。また丹徒葛村嶺竈墩のこの文化に伴う黒皮陶の形は周代の豆、尊、皿、盆などと似ている。殷末、周初の中原の青銅器がこの地にもたらされ、陰陽営、鎖金村、安懐村の未擾乱層その他の遺蹟からも多く銅のスラッグが出ることから知られるごとく、この地で青銅器鋳造が行われ出したと考えられる。そして中原からもたらされた青銅容器の器形、文様がこの文化の土器にも影響を与えたことは大いにありうることである。

印文硬陶を伴う文化が春秋戦国時代に当ることは前述のごとくである。石器も前代に引つづき同様なものが使われるが、分量は減ずる。農業、狩猟、漁撈も相変らず盛に行われる。印文陶にも前代の伝統がつづいているが、器形には同時代の青銅器を模した形が行われ、焼成火度も高くなり、技術の進歩がみられる。この地域は呉越の領域内で、その時代中原地域との交渉が頻繁であったから、当然中原の銅器の影響を受けたと考えられる。尹煥章は大凡右のように書いている。

水野清一先生は(77、三四—八頁)印文軟陶が西周、また殷に遡ることも可能と考え、そう考えると長江流域の印文陶が殷文化の影響によることが可能になってくる。近時発掘の鄭州では、殷時代、とくに二里岡期の印文が豊かなことがわかっている。とくに、その

羽状文を全面に施した紅褐色の小壺、雷文を全面にした釉陶壺は印文陶の源流とするにふさわしい、といわれる。また無錫栄巷の墓の印文硬陶に伴つた釉陶豆は長安普渡村、洛陽老城区、丹徒煙墩山の西周墓のものに近いが、やや相違があることから、西周後期か東周前期ということができ、またそれに伴う尊も銅器の尊から出た形として西周ごろと認められ、羽状刻文の盒は晩周の盒に一致し、獸形の耳も戦国銅器の装飾を思わせることなどを観察し、印文硬陶は春秋、呉越時代（前四九三―三三四）に盛時があると考えられた。

現在我々が知りうる限りの資料を商量するに、尹煥章、水野先生の考えはほぼ妥当と考えられる。印文陶の現れない前に華中に龍山系の文化が拡がつていたことは明かであるが、この文化には華中各地で様々の地方形があり、また十分明かでない点も多く、いまこれについてくわしく考察する余裕をもたない。しかしこの文化に中原地域の殷文化の影響が加わつたものが印文軟陶を伴う文化であることには疑いない。水野先生は印文軟陶の印文が殷のうちでも二里岡期、すなわち殷中期のものと共通することに注意されたが、他にも中原の殷中期の文化要素が印文軟陶を伴う文化に認められる。目立つ例をあげると、南京安懐村からは殷中期の特徴である饕餮文印文（86、三五頁）のやや崩れたものが出ており(76、図三、6)、二里岡から出た「陶祖」（10、図版一四、1）と同じものが鎖金村から出(58、図版四、18)、殷中期に伴う形の豆（86、三六頁）が丹徒葛村にある（75、図版二、9）などであり、銅鏃についても尹煥章は中原の殷末周初のものに比しているが、同じ形式のものは殷中期から既にあるのである(56、五九頁)。湖北黄陂楊家湾から出た殷中期式の銅器(82)、は、無理解からくる崩れが饕餮文に認められ、この地方で出来たものと思われるが、先に引いた安懐村の饕餮文印文にも並行の現象があり、殷中期の青銅器文化がこの地方に伝わつて、やや地方化した器物が作られた証となしうる。この銅器は印文陶の遺蹟中から出ているが、遺蹟の記述は要をえず、両者の関係は明かにし難い。

長江流域に及んだ中原の殷文化が、古く殷中期文化、すなわち前十四世紀を下限とする文化（86）であることは、以上のごとく明かであるが、その実年代は多少のずれをみても、尹氏のごとく殷、周初といえるであろうか。丹徒煙墩山の大坑、その二つの附葬坑は、踏査者により、深さ、銅器の形から同時代と考えられている（19、五八頁）。大坑から出た鐏（36、四五頁）と附葬坑二の鐏（同、四六頁）の全く同制たると、附葬坑一と二の鼎の形の比較から、このことは確認されよう。この一括銅器のそれぞれがこの地方出来か、またすべて同時代のものか、などについては周匝に論ずる紙面の余裕をもたない。しかし宜侯矢𣪘から年代の一点が西周前期であることは誤りない。この中の鬲と印文陶に伴う陶鬲との関係は尹氏のいうごとくである。この中の盉（19、図版五）は中原にみない独特な形であるが、頸の文様（78、附図一、11）はやはり西周前期のものを模したものと考えられる。この盉の形は南京北陰陽営の墓地から出た獸頭を飾つた注口器（79、図一二、図版一二、3）と相近い。青銅でこの形の器を作つたものであろう。この注口器は印文軟陶を伴う文化層に属する灰坑が破壊している、これより一つ古い墓地層から出ているのである。墓地層と印文軟陶の出る層とが何年位へだ

たつたものかはわからないが、煙墩山の銅鬲は印文軟陶に伴うものと共通、盉はもう一つ古い層のものの伝統を襲う、という事情を考え併せると、印文軟陶を伴う文化は西周前期をそう遡りえないことが知られる。中原の殷中期の文化は、何百年かおくれて長江流域に及んだと考えるべきであろう。溧陽社渚で春秋戦国式の銅利器を伴うことの知られる印文硬陶と伴出する釉陶豆が、前記のごとく煙墩山附坑二の釉陶豆と殆んど全く同じであることも、印文軟陶が西周をそう古く遡ると考えるのを困難ならしめる根拠である。尹氏の引く印文軟陶を伴う文化から出る銅戈を模した石戈は、胡が長く、内がやや上向きになつていて春秋戦国のものに近い。また安徽涇県の、印文軟陶を伴う文化からも「帯胡石戈」が出ている(63)。胡の長い戈は西周後期以後に現れるものである。このことからもこの文化が東周までつづいていることが推測される。或いは尹煥章、水野先生の考えられるよりやや新しく、西周、東周前期位といつた方がよいかもしれない。

遺蹟の層位に注意を払いながら、遺物を記述する際にはその各層への帰属を一切明記することをしない中国人考古学者の奇妙な風習に妨げられ、当然もつと明瞭にわかつて来てよいはずの印文陶の問題も、今はこの程度以上にはわかつていない。報告書記述形式の改善を切望するものである（一九五八年五月）。

参考文献

（「報」は考古学報、「文」は文物参考資料、「考」は考古通訊の略称）

1 浙江省立西湖博物館、呉越史地研究会合編　杭州古蕩新石器時代遺址之試探報告　一九三六
2 陳志良　奄城訪古記（奄城金山訪古記所収）一九三五
3 金祖同　金山衛訪古記（同右）一九三五
4 杭県第二区遺古文化遺址試掘簡録（呉越文化論叢所収）一九三七
5 蘇鉄　呉越文化之探査（呉越文化論叢所収）一九三七
6 施昕更　良渚（杭県第二区黒陶文化遺址初歩報告）西湖博物館考古報告第一集（京大人文科学研究所蔵複写）
7 松本信広　江南踏査、東京、一九四一
8 饒惠元（安志敏摘要）　江西清江樟樹鎮東南牛頭山和大姑山発現的石器和陶片、科学通報、一、七（一九五〇）四七七—四八四
9 南京附近考古報告、南京博物院集刊之一、上海、一九五二
10 安志敏　一九五二年秋季鄭州二里岡発掘記「報」八（一九五四）、六五—一〇七
11 王志敏　三年来江蘇省境内発現大量的新石器時代遺址「文」一九五四、三、一一九—二〇
12 朱江　江蘇松江県古代海防要地金山衛遺址的現況「文」一九五四、三、一二〇—一
13 古塞　浙江甌江下游発現四処古代遺址「文」一九五四、一二、一八〇
14 尹煥章　華東新石器時代遺址、上海、一九五五
15 朱江等　江蘇無錫仙蠶墩発現古遺址及漢墓「文」一九五五、一、一二九—三〇
16 湖北京山発現古代陶片「文」一九五五、二、一五五
17 王勁等　湖北京山県石龍過江水庫工程中発現的新石器時代遺址簡

報「文」一九五五、四、四一—四

18劉啓益　一九五四年発現的新石器時代遺址与遺物「文」一九五五、四、九五—八

19江蘇省文物管理委員会　江蘇丹徒煙墩山出土的古代青銅器「文」一九五五、五、五八—六二

20饒恵元　江西清江県的古遺址、古墓葬「文」一九五五、六、八九—九三

21灰土　南京北郊発現石器等遺物「文」一九五五、六、一一九—二〇

22党華　二年来浙江発現的新石器時代遺址与遺物「文」一九五五、八、六八—八四

23江蘇呉江県松陵鎮付近発現古遺址「文」一九五五、一一、一二八

24江西省清江県獅子山発現古遺址「文」一九五五、一一、一三六—七

25江蘇丹徒大港中学「課外歴史活動小組」在丹徒烟墩山等地採集到大量陶片「文」一九五五、一二、一六一—二

26王志敏　江蘇省南部新石器時代文化「考」一九五五、一、三二—三

27胡繼高　江蘇省呉県発現古遺址「考」一九五五、二、五一

28朱江　呉県五峰山燧燧墩清理簡報「考」一九五五、四、五〇—三

29茅貞　丹徒発現新石器時代文化遺址「考」一九五五、四、六一

30何天行　蕭山湖岸発現新石器時代「考」一九五五、四、六二

31董巽観　浙江嘉興双橋古文化遺址調査記「考」一九五五、五、一九—二二

32党華　浙江嘉興双橋発現的新石器時代遺址「考」一九五五、五、二二—五

33王士倫等　浙江紹興湞渚考古簡報「考」一九五五、五、三三—三六

34饒恵元　江西清江的新石器時代遺址「報」一九五六、二、三三—六八

35謝春祝　江蘇無錫錫山公園古遺址清理簡報「文」一九五六、一、二六—三二

36江蘇丹徒煙墩山西周墓及付葬坑出土的小器物補充材料「文」一九五六、一、四六—七

37石祚華　江蘇省文管会配合四一四工地清理一批古墓「文」一九五六、三、八三

38趙人俊　寧波地区発掘的古墓葬和古文化遺址「文」一九五六、四、八一—二

39尹煥章　江蘇溧陽社渚確有新石器時代文化遺存「文」一九五六、五、七七

40藍蔚　略談三年来武漢市的文物保護与発現「文」一九五六、七、一七—八

41汪済英　銭塘江流域五個県的幾処古遺址初歩調査「文」一九五六、八、二五—八

42魏百齢等　無錫華利湾古墓清理簡報「文」一九五六、一二、四七—八

43李鑑昭　蘇州市郊金雞墩発現新石器時代遺跡「文」一九五六、一二、七六

44茅貞　丹徒発現古遺址「考」一九五六、一、三五

45喩德智等　湖北圻春易家山新石器時代遺址調査簡報「考」一九五六、三、二一—四

46 夏鼐　湖北圻春発現両処古代文化遺址「考」一九五六、四、三二—三
47 金祖明　紹興鴻渚附近発現新石器時代遺存和古墓葬「考」一九五六、五、四三—四
48 何天行　浙江塘棲発現新石器時代遺址「考」一九五六、五、四五
49 方介堪　浙江温州附近的新石器時代遺存「考」一九五六、六、五六—七
50 魏百齢　江蘇丹徒癩竈墩発現新石器時代遺存「考」一九五六、六、五七—八
51 張世全　揚州鳳凰河工地発現古文化遺址「考」一九五六、六、六一—二
52 金杏村　安徽安慶発現古遺址「考」一九五六、六、六二
53 張雲等　浙江湖州市区初次発現大豆印紋硬陶「考」一九五六、六、七九—八一
54 長沙発掘報告、中国田野考古報告集、考古学専刊、丁種第二号、北京、一九五七
55 胡悅謙　安徽新石器時代遺址的調査「報」一九五七、一、二一—三〇
56 趙全古　鄭州商代遺址的発掘「報」一九五七、一、五三—七三
57 朱伯謙　紹興鴻渚的漢墓「報」一九五七、一、一三三—四〇
58 尹煥章等　南京鎖金村遺址第一、二次発掘報告「報」一九五七、三、一三—三〇
59 李正光等　長沙沙湖一帯古墓発掘報告「報」一九五七、四、三三—六七
60 清江発現新石器時代和殷周時期的遺址「文」一九五七、一、八三
61 趙人俊　呉県発現新石器時代遺址「文」一九五七、三、八一
62 白冠西　安慶市発現劃文陶器「文」一九五七、九、七九
63 周彬　涇県赤麓山発現新石器時代遺址一処「文」一九五七、一二、八一
64 蔣讚初　江蘇揚州付近鳳凰河遺址発掘簡報「考」一九五七、一、一四—八
65 趙人俊　浙江新登、餘姚発現新石器時代遺物「考」一九五七、一、五三
66 鍾公佩　浙江建德安仁郷発現新石器時代遺址「考」一九五七、一、五三—四
67 葛家瑾　南京中央門外発現新石器時代遺址「考」一九五七、一、五四
68 金城　江蘇崑山陳墓鎮発現新石器時代遺址「考」一九五七、一、五五
69 黄德彰　浙江杭県東湖村発現古文化遺址「考」一九五七、一、五五—六
70 牟永抗　浙江紹興鴻渚東漢墓発掘簡報「考」一九五七、二、六—一二
71 王士倫　浙江蕭山進化区古代窰址的発現「考」一九五七、二、二四—九
72 茅貞　値得重視的丹徒地下宝蔵「考」一九五七、二、五〇—一
73 朱江　江蘇南部〃硬陶与釉陶〃遺存清理「考」一九五七、三、八—一三

74 馮信敖　江蘇崇徳羅家谷古遺址調査記「考」一九五七、四、四八—五二
75 尹煥章等　江蘇丹徒葛村新石器時代遺址探掘記「考」一九五七、五、一八—二四
76 羅宗真　南京安懐村古遺址発掘簡報「考」一九五七、五、二四—九
77 水野清一　中国先史時代研究の展望、東洋史研究、一六、三（一九五七）、一—三九
78 樋口隆康　新発見の西周銅器群とその問題点、同右、四〇—六一
79 趙青芳　南京市北陰陽営第一、二次的発掘「報」五八、一、七—二三
80 尹煥章　関於東南地区幾何印紋陶時代的初歩探測「報」五八、一、七五—八五
81 周世栄　湖南省首次発現戦国時代的文化遺存「文」一九五八、一、三九—四一
82 郭冰廉　湖北黄坡楊家湾的古遺址調査「考」一九五八、一、五六—八
83 李鑑昭　江蘇無錫閶闔域的調査「考」一九五八、一、六一
84 王士倫　浙江嘉興徐婆橋発現印紋陶「考」一九五八、三、三七
85 陳福坤　江蘇江寧県発現〃印紋硬陶〃古墓「考」一九五八、四、五五—六
86 林巳奈夫　殷文化の編年、考古学雑誌四三、三（一九五八）、三一—五五

訂正

前号（四一巻三号）に次の脱落がありましたのでつつしんで訂正いたします。

六三頁下段六行目、ゲッティゲン大学の教授（シナ学者）の次に、「Hans O. H. Stange 氏」を附加する。

執筆者紹介

富沢霊岸　島根大学助教授
平山敏治郎　大阪市立大学助教授
中山修一　西京高校教諭
水野清一　京都大学教授
伊藤道治　京都大学助手
林巳奈夫　京都大学助手